

研究雑話 (2)
「たんなる彫刻家であつてはならない」(E・セガン)
 障害児教育創始の背景 (二)
 藤井カ夫

前回は、「友人を招くように楽しく夕食をとれるように」としてなされた精神病院の院内改革のなかで、障害児教育が創始されたことについてお話ししました。今回はもう一つの背景、前回が人間の尊厳という道徳療法の実現であったのに対して、今回は、それを可能にした人間そのものに対する認識の到達段階についてお話ししたいと思います。人間とはなにか、どのように発達し約束されているのか、脳神経系についての研究の到達段階についてです。障害児教育はいつの時代でも、人間自身に対する自然科学的認識ぬきに存在しないようです。諸田先生がときどき猿学について話され、とても興味があるとおっしゃいますが、先生の問題意識からみても自然科学的な認識の事例から示唆を受けることが多いからなのでしょう。E・セガンがなぜ障害児教育の創始者になり得たのか、脳研究に対する彼の態度は我々に多くのことを教えてくれます。

(一) 「たんなる彫刻家であつてはならない。真の意味で芸術家でなければならぬ」(一八六〇)。
 一八三〇年代は神経生理学でも一つの革命が起きた時代であります。ベル・マジジャンディの法則といって脊髄反射弓の発見で、脊髄の前根からは運動性の神経繊維が、後根には知覚性の神経繊維があるということが明らかにされたのです。C・ベルというイギリス人とF・マジジャンディと

脳研究の到達段階 (1830年代)

- A. ベル・マジジャンディの法則
 (脊髄反射弓の発見)
 脊髄前根—運動性 (遠心性)
 脊髄後根—感覚性 (求心性)
- B. フルーランの機能原理
 (上位中枢の役割)
- ① 大脳半球—感覚を受容し、統合する。
 - ② 小脳—身体運動の協調を司る。
 - ③ 延髄—呼吸等、生命の維持をはかる。

いうフランス人により二〇年代から三〇年代にかけて刺激実験や切断実験により解明されました。これは、ハーベーの血液循環論(一六二八年)以降最も大きな発見の一つで、人間の行動の発達は、行為しつつ知覚するという神経機序のなかに約束されているということを論証したこととなります。この発見は他方で、脳そのものはどのような論議がなされることになりました。精神病院の患者に対して死後剖検がなされ、脳の機能を解明しようとして死しました。代表的な人物はF・J・ガルで、骨相学といって脳機能の特徴が頭蓋骨にもあらわれると考えたのです。セガンはこれに対して、いくら彫つてもなにも解明できない。「たんなる彫刻家であつてはならない、真の意味で芸術家でなければならぬ」と批判しています。即ち、いくら臨床

床解剖をやってみても人間の発達の理解することにはならない。知覚し行為している人間

のものに働きかけてはじめて意味がある。これこそ芸術家といつてよい営み、と云うのであった。
 (二) 「手は突き出た大脳、生活のなかで手が精神の調節器のように働くような場を設定しよう」(一八四二)。知覚し行為するその最も代表的な器官が手です。手が突き出た大脳。セガンは障害児教育の目的を、「生活のなかで手が精神の調節器になるように、生活のなかで場面を設定すること」に置きました。まさに障害児教育の創始者たるゆえんです。なぜ、これほどまで見事に本質に迫り得たのでしょうか。当時の生理学研究に対する積極的で、無理のない深く鋭い理解、この点にあると思います(別表参照)。

① まず、大脳半球の役割について、よくわからないにしても、脳神経系は知覚(求心性)と行為(遠心性)により成り立っており、意志が生まれるということ。それゆえ、何らかの原因で両者(知覚と行為)の相互作用が弱い場合、意志が育たないこともありうるということ。

② 障害児はそうした人たちで、知覚系と行為系を相互作用させる機会がなかった。しかも、眼前の障害児は年齢的にすでに神経系の成熟の時期を終えた人たちで、早期に手当を施せばこれほどまで重くはならなかったであろう。

③ とにかく、手が精神の調節器として働くように生活のなかから場面を探してみよう。そのためにも、呼吸や小脳系も大事で、ゆったりした環境としっかりした身体をつくっていこう。

これがセガンの考え方であった(北海道教育大学助教授)。